

## 書評

倉橋圭子 著

### 『中国伝統社会のエリートたち——文化的再生産と階層社会のダイナミズム』

(風響社、二〇一一年)

上田 信

中国には族譜、あるいは家譜と呼ばれる資料群がある。日本の中国史研究では「族譜」とするのが一般的ではあるが、中国では「家譜」と呼ばれている。それは中国社会を形づくる宗族とよばれる父系同族集団が、自らの系譜を明らかにする目的で編集し続けてきた記録である。

本書の第一章二節「族譜簡史」のなかで、手際よく紹介されているように、族譜の淵源は中国古代の周代初期にさかのぼる。父系的な親族関係にもとづいて社会の秩序が整えられる流れと時を同じくして、族譜も生まれたということになる。その後、魏晋南北朝から当代までは、支配層のあいだで序列などを定めるために、国家が族譜を管理する時代が続く。宋代になり科挙試験によって登用された人

材が、国政を担うようになる。儒教的倫理を身につけた人々が科挙を受け、登用されて官僚となるという仕組みが一般化すると、彼らは儒教の理念に沿って自らを生み育てた同族集団を再編し、同族の記録である族譜を編纂するようになる。現在でも参照される族譜のパターンは、このときに確立したものである。

明清時代に族譜編纂の隆盛を見ることとなり、図書館に収蔵されているもの多くは、この時代出版されたものである。近代に入っても外観は木版線装本から活字印刷洋装本、さらにはインターネット上の電子版などに変わりながらも、いまも現在進行形で族譜の編集・公開が行われている。上海図書館の二階の一角に、本書の著者も利用した家譜資料室がある。ひっきりなしに電話が掛かり、「いま家譜を編集しているところなのだが、我が一族に関する族譜は無いか」という問い合わせに、家譜に精通した図書館員が応対しているし、毎日のように二・三名の老人がその一族の家譜に収録する祖先の記録を、せわしげに筆写している姿を見ることができると。

社会主義中国成立後、宗族は封建的な古い遺物であるとして批判され、文化大革命の時期には族譜を所持していることが発覚すれば、つるし上げの対象ともなりかねなかった。前世紀八〇年代なかばから、福建など華僑・華人の出身地で

復活した族譜編集は、九〇年代に入ると社会的な絆を求める人々によって、いたるところで進められているのである。

歴史の表には決して登場しない庶民に関する記録も含む族譜は、社会史研究のうえで可能性を秘めた資料群ではあるものの、きわめて扱いづらい資料群でもある。本書の表現（三八〇―三九ページ）に基づいて述べるならば、「悪を隠し善を賞揚する」とする族譜の宗旨のため、族譜の記載内容は往々にして虚飾を免れ得ず、族譜を歴史資料として利用するにあたっては、大きな制限が課されている。また、族譜の特性と利用可能性を論じた一節（六六〇―六八ページ）で指摘されているように、族譜編集の主体は男性の読書人・地主・官僚経験者・富商などの郷紳であり、族譜の受容者も、それと同じ社会的存在であったために、族譜の内容もまたこうした社会的存在に偏っている。そのため計量的な統計資料として族譜を使用とする際には、大きな制約が生じるのである。評者もまた族譜に基づいて歴史人口学的な研究を進めようとしているが、この制約から逃れることの難しさを実感している。

本書の学術的な成果の一つは、こうした族譜の性質に適した利用の方法を提示したことにある。つまり記録されたデータのもっとも整った階層（族譜生産者⇨郷紳⇨エリート、族譜消費者⇨郷紳⇨エリート）の中核的な部分である科

挙エリートに焦点を絞り、厳密な統計的な分析を展開したところにある。具体的手順（たとえばオッズ比など）については、本書を手にとりて確認していただくとして、その成果は実に豊富なものとなり、中国の社会、文化、政治における研究上の通念に、一石を投じるものとなった。中国で族譜の収集と公開が進展している状況のなかで、本書で示された方法に基づいて、複数の研究者と協力者を組織したプロジェクトとして研究を進めるならば、一七世紀から現在にいたる中国社会の理解を塗り替える可能性を秘めている。

研究プロジェクトとした理由は、族譜の統計的な分析のためには、多大な労力と時間を必要としているところにある。また「一七世紀から」とした理由は、現存する族譜の数量がこの時期から急増するところにある。この時期は世界的に見た場合、現代社会の原型が形づくられた近世、early modern という時代でもある。伝統社会から離陸して「近代」を形成するに当たって主導的な役割を果たした人々、たとえばイギリスのジェントリー、フランスのブルジョアなどと、同じような手法を用いて比較することが可能であろう。また下限を「現在」までとした理由は、現在の中国で政治や文化の領域で活躍している人物の多くが、直接に面談するのと同じに確信するにいたるのであるが、中華人民共和国成立以前に家庭環境のなかで「文化資本」

「社会関係資本」(ブルデューを引用しながら論を進めている本書二〇〜二一ページを参照)を身につけているところにある。「解放」前からの継承については、二〇世紀の中国では触れることがはばかれる研究主題であったが、近年では逆に過去からの系譜を誇る気風も観察される。

本書の内容を紹介する。

序章「社会的流動性と文化資本」においては、本書の研究対象となる科挙エリートについて、問題の枠組みを提示する。明清期中国社会において、エリート層の中核を成していたのは、科挙によってその地位を獲得した科挙エリートたちであった。科挙は、ほぼ全ての階層に開かれ、ただ試験の結果のみによって判定された個人の能力を基準に、国家の官僚の地位を配分するという、近代以前の世界としては他に類例のない、極めて開放的・競争的な選抜制度とされる。しかしその開放性が限られた階層の中でのみ存在していたこと、また、明代後期から科挙合格者の階層固定化が顕著になったという指摘もある。これらの争点を実証的に解明するために、家系に継承された文化資本に焦点をあて、その継承のしかたと働きとを族譜に基づいて検討し、科挙エリート層の再生産メカニズムを解明すること、また、科挙による社会的上昇ルートから排除された在地のエリート層の動向を併せて検討し、明清期中国社会のエリート層

の再生産と分化の過程の包括的な解明を試みることに、本書の目的があるとする。

第一章「歴史資料としての族譜」では、本稿の主な資料である族譜の、清代および民国期の具体的な編纂過程から看取し得る資料的な特性、またその特性ゆえに生じる、歴史資料としての利用可能性と限界について検討している。すでに本稿で触れたように族譜が有する「悪を隠し善を賞揚する」という作成趣旨に由来する性格によって、伝の記載内容や系譜関係などに虚飾が生じやすい。しかし同時にその趣旨ゆえに、記載された「事実」の背後にある編纂者の意識や、当時の社会的・文化的規範を読み解くための格好の資料ともなるのであるとする。

続く第二章「分析方法について」(副題より)では、前述の族譜の記載データのもっとも整った階層、すなわち科挙エリート層について、その世代間再生産過程の特徴を考察する方法を提案している。分析対象となる江蘇省常州の惲氏は、明代半ばから清末に至るまで科挙合格者を輩出した江南の代表的な「科挙世家」であり、太平天国の前後にわたって校訂の行き届いた惲氏族譜が現存している。実際の合格者は一族二五支中の一支支に、しかも兄弟を核としたクラスター状の集団となって現れており、分析はこの分支の、兄弟を囲む主な家族成員からの継承度の測定が主

となる。この方法では、時代・地域を超えたさまざまな規模の母集団に応用でき、複数事例間の比較も可能になり、母集団の性質を正確に推定できる結果が得られる点も重要であるとする。

第三章「父系による文化資本の継承」（副題より）では父系直系親族間の科挙地位の継承を検討した。継承度の測定結果によれば、父あるいは祖父の地位によって子孫の科挙合格には統計的に有意な差が生じているが、曾祖父の地位による影響は見られないという、興味深い結論が提示されている。明清期の教育システムは明代後半以降、科挙受験準備を目的とするエリート教育とリテラシー習得の庶民教育とに分化し、エリート教育は小規模な家塾で家庭教師により行われた。教師の選択や教育内容には、雇用主である父・祖父の意向が強く反映し、父・祖父自身も「督課」という形で子どもたちの教育に参加し、受験に必要な知識・技術ばかりでなく、卒業こそ家業である、という規範意識が継承されていった。家庭で催された文化活動や社交は、習得した知識・技術や作法の実践の場として重要であった。また、明末以来、世家間の知的社交の場で育まれ、各家系独自の学問として継承された「家学」は、江南科挙世家の象徴資本として、地元江南での合格が困難になった清代乾隆期の生員たちに学業継承のインセンティブを与え、また

さまざまな社会関係資本や経済資本を引き寄せる役割を果たしたとする。

第四章「文人画家と科挙エリートの再生産」（副題より）では実際に画家を輩出した常州の惲氏の族譜を分析するという利点を活かし、文人画家たちが科挙エリートの再生産に果たした役割について検討する。継承度の測定結果では、父あるいは祖父が合格者や生員でなくとも、画家であれば子孫が合格者となる確率が有意に高いことが確認されたが、曾孫の合格には影響がなかった。この結果は前章の合格者・生員からの継承のされ方とよく似ており、合格者・生員と画家との間に類似の資本が存在していたことが推測された。中国画壇では明末の董其昌以降、専門画家に対する文人画家の優越が確定し、画家は士人としての資質を併せ持つことが求められるようになる。惲氏の文人画家たちも自身の科挙の可否にかかわらず、督課などの受験スキルや家業を絶やすまいとする規範意識を確実に継承し、実行もしている。また、文人画（南画）の正統を自任する清初六大家の絵画などの江南のエリート文化は、清代の康熙・乾隆兩皇帝の認証を得て、中国中央の正統文化に定位される。このことは、清初六大家のひとり惲南田の画法を「家法」として受け継ぎ、江南での受験競争が激化した乾隆期に、北京での寄籍受験を期して北上した惲家の文人画家た

ちに、高官との交遊など定住・受験に有利な社会関係資本をもたらしことになった。

第五章「女性の役割」では、女性を媒介とした科挙地位の継承を検討している。継承度の測定結果では、母・姉妹それぞれの実家・婚家の地位が、いずれも父・祖父から独立して、息子・兄弟の科挙合格に影響していることが確認された。女性の影響力は、女性自身によるものと実家・婚家の姻戚によるものがある。江南の上層家庭では明末以降、女性への教育が相当に普及し、母として子らの督課を担当したほか、家庭における文化活動の担い手ともなり、清代には「家学」や「家法」の継承者となる者も現れる。彼女たちはこれらの象徴資本を婚家へ伝えることを期待され、父や祖父より高い官位・科挙位を持つ家の子弟との縁組に恵まれる。母の実家や姉妹の婚家からはしばしば経済的な援助があり、彼女たちの息子・兄弟の勉学の継続を助けている。また、姻戚の子弟は家塾の同学でもあり、母の兄弟が塾師を勤めるケースは少なくない。子弟の良好な教育環境のためにも姻戚の選択には慎重を期さねばならないが、本章の事例では北京への寄籍が始められて後、娘の嫁ぎ先として北方の科挙世家を選んでいることが注目される。「家学」「家法」は同じ宗族の中でも、世家とみなされた家系の成員によって排他的に継承されており、階層間の文化的

格差を再生産しているが、女性がこの継承者に加わったことで、格差拡大のペースは倍加したものと思われる。

科挙世家の子弟の北京寄籍受験が軌道に乗り始めた乾隆の末期、常州では郷に住む在地エリート層の台頭が始まっていた。第六章「在地エリートの台頭」では、代々営農などによって一定の資産を築き、子弟に科挙受験教育を授け得る経済資本を持ちながらも、おそらくは他の資本の不足から生員にすらなれない、いわば科挙による社会的上昇ルートから排除された郷居の在地エリート層が、地域の災害救援や孤児救済、水利や道路、橋の修築などのインフラ整備など、当時「善举」と総称された地方公益活動を自らの責務として担う、その清末までの次第を叙述している。善举の担い手たちに共通する性向を表わす言葉として頻出するのが「郷居慷慨」「樂善好施」である。かれらの父・祖父も往々にして同じ性向の持ち主であり、これは在地社会で衆望を担ってきた彼らの階層のハビトゥスを現した言葉なのである。ここからは、県城に住み「外事に与らず」私事に没頭する科挙エリート層への対抗意識がうかがえる。彼ら在地エリート層は、選抜過程からの排除によって押し付けられた「郷居」の立場を逆手にとって、元來は科挙エリート層が威信を発揮する場であった領域に、無位無官のまま進出し、実践を通じて地域問題の解決能力を示

すことで、在地社会における科挙ヒエラルキーを無力化させていく。清末にかけて彼らが着実に地方政治の場に地歩を占めるに従い、善挙は在地エリートばかりでなく、一部科挙エリートをも巻き込んだ、いわゆる「地方エリート」

の多元的な象徴資本のひとつとなり、地方における科挙エリートの地位は著しく相対化されたと、著者は結論づける。本書の価値は、本稿の冒頭でも述べたように、厳密な統計学の方法をはじめ族譜研究に用いたという点である。中国や台湾、アメリカなどの研究者がすでに族譜の統計学的分析を行っているが、本書ほど厳密に適用したものは管見の限りでは、存在しない。このことは、本書が歴史学の領域に止まらず、社会学の領域での比較研究の端緒を開きうることを示している。

他方、統計に拠らずに族譜の記述史料などを用いたエリート再生の実情を描いた部分は、単に統計結果の解説に止まるものではない。清代の家庭生活や文化サロン、さらには地域社会の姿を、具体的に描き出すことに成功している。女性の役割を論じた部分を読むと、清代小説の傑作『紅樓夢』に描かれたさまざまな場面を想起させる。主人公の賈宝玉は、科挙に合格して官僚とはならなかったものの、科挙エリートとなるべく周囲から期待されていた。本書を讀んでから、あらためて『紅樓夢』を読むと、なるほど、

と膝を打つこととなる。科挙を否が応でも意識せざるを得ない清代のエリートたちが、賈宝玉の姿に憧憬を抱き、近代に入っても「紅学」と呼ばれる学問の領域を形成したことも納得できる。

今後、著者に期待したいことが、一点ある。そもそもの本研究の起点でもあるエリート論が、政治の担い手に関する関心から出発しているにも拘わらず、本書の論じている範囲が社会と文化で終わっている点である。科挙合格にいたるプロセスは、明確に論じられている。今後はその先、みごと合格して官僚になった後に、その身体にまで刻み込んだ「文化資本」が、彼らの政治的所為にどのような影響を与えているのであろうか、こうした点にぜひ踏み込んでもらいたい。

道筋としては本書の議論の進め方とは逆に、たとえば一九世紀後半の大清帝国変容・瓦解時期に政策決定に関わった官僚の出自を、族譜を利用してたどることで、そのエリートとして有する文化資本・社会関係資本と政治的判断との関連を分析するといった視角があってもよいのかも知れない。なお清代の場合には、満州族・モンゴル族出身の官僚たちと漢族官僚との比較も必要となるであろう。

今後の研究の展開を、楽しみにしている。

（本学文学部教授）